

エッセイ 教師と学生を結ぶ

中米エルサルバドルとの出会い
―友となり、共に歩む―

吉見かおる

カナダから中米へ

エルサルバドル (El Salvador) はスペイン語で「救世主」を意味する。中米に位置するこの国はとても小さく、日本の四国に淡路島を加えたほどの大きさである。ラテンアメリカ諸国のグアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカに囲まれ、熱帯気候の影響もあり自然がとても美しい。人口も約七〇〇万人と少ないが、国外に在住するサルバドル人の数は実に多い(米国に約二五〇万人が住んでいると言われている)。街を歩くといたところで中米独特のサルサを耳にし、「ラテンの国に來たな」という何ともいえない解放感を味わう。

首都はサンサルバドル。高層ビルが立ち並び、外資系企業で働くビジネスマンが街を行き来する都会である。しかし車で十分も走れば、バラックがいくつも連なるスラム街が目に入る。その一つのサンタ・テクラ市マルゲリータ地区に「みつばち保育所 (Las Abejitas)」はある。小さな寺子屋のようなこの場所は、今から二〇年以上前の一九九七年、内戦が終結した五年後に開設された。以来、二歳から十五歳までの子どもたちが七〇名ほど、平日の午後に集う学びの、そして大切な憩いの場となつて

いる。

私のエルサルバドルとの出会いは一九九六年、カナダのバンクーバーで留学生活を送っていた時だった。当時の私は、日々英語を黙々と勉強し、それ以外は特にやることもなく、ぼんやりと流れる時間と空間の中で暮らし、充実した留学生活に見えながら心の中には空虚さを抱えていた。「このままカナダに滞在し続けて、その後はどうなるのだろうか?」という疑問が湧いてくるたびに、「英語さえ勉強していれば何とかなる」と自分に言い聞かせた。そんなある日、中米で生活をする姉から一本の電話がかかってきた。「来月、日本に一時帰国するから、経由でバンクーバーに寄ってもいい?」。私は、気分転換になるかもしれないと思い、一年ぶりに姉と会うことにした。

姉は私と正反対の性格で、真面目で心優しい一方、人と異なることを好む変わり者だった。久しぶりに会う姉は、赤道に近い国で日差しを思いきり浴びているのか、顔は真っ黒に日焼けをしていて、真っ赤なジャケットを羽織っていた。まさに南国からの訪問者だった。そんな姉からエルサルバドルという国名くらいしか知らない国の話を聞いた。一番衝撃を受けたのは、その国がつい最近まで内戦の真只中にあったという話であった。バンクーバーのような平穏で住み心地の良い街で暮らす私には、別世界の話だった(事実、バンクーバーは、英経済紙『エコノミスト』の調査部門により、過去に三度「世界で最も住みやすい都市」に選ばれている)。

その後エルサルバドルを訪問し、姉と生活を共にする仲間と出会い、みつばち保育所に通う子どもたちを知ることになるうとは、この時の私は知る由もなかった。あれから二十年以上を経て、エルサルバドルで出会った人たちは私の友人になった。当時、保育所で出会った七歳のジェシカは喧嘩ばかりする問題児だったが、今では二児の母になり、その子どもたちも保育所に通っている。勉強が全くなかったビルバードは、一族の中で初めて大学に進学するまでに成長し、先日、仲間から進学祝

いにネクタイを贈られた（この国では、ネクタイを付けて試験を受ける習慣がある）。そして今、私のゼミ生たちがエルサルバドルの子どもたちのストーリーを共有し始めている。



サン・スクリストバル孤児院（1993年、©オリーブジャパン国際開発協力協会）

はじめての訪問

私が最初にエルサルバドルを訪問したのは一九九六年の十二月、ちょうどクリスマス・イヴの日だった。十二月だというのに真夏のようなカンカン照りで、イメージ違いのクリスマスにただ驚くばかりだった。真冬のカナダから南下した私は、案の定、到着してすぐに気候の違いにノックアウトされた。体全身にビリビリと痒みが走り、唇はタラコのように腫れあがって、胃腸の調子もなんだかおかしい。滞在予定は二週間だというのに初日からこの調子ではと先が思いやられた。充分な水もなく、ガスに火をつけるのも一苦勞。本当に別世界に来てしまったと目の前が真っ暗になった。

姉は、デイジー、カルメン、メリダという三人のエルサルバドル人姉妹と、ルチアという高校を卒業したばかりのイタリア人の仲間と特に仲が良く、内戦後の貧しい地域で生活を取り戻そうとする人々のために、現地のスタッフとして慈善活動をしていた。私は二週間の滞在中、危険だからという理由で一人で外出することは許されず、いつもこの仲間たちと一緒に行動することになっていた。私はスペイン語が全く理解できず、彼らは英語をほとんど話さない。しかし体調に異変が起きるほど生活環境の違いに悪戦苦闘しながら、私はこの国の人たちのことが好きになった。その後も彼らと交友を続け、エルサルバドルについて少しずつ親しみを持つようになると、この国の内戦の歴史を知らなければいけないと思うようになった。彼らともっと友だちになりたかった。

内戦の爪跡

「第二のベトナム戦争」と呼ばれるほど熾烈な戦いだったエルサルバドル内戦（一九八〇―一九九二年）の歴史はほとんど知られておらず、今もその史実を語る資料は乏しい（実際、私のゼミ生たちにこの内戦につい

てリサーチする課題を出したが、限られた資料しか見つからず苦戦していた。この内戦の実情を知るために、二〇〇四年制作の『イノセント・ボイス・十二歳の戦場』(Voces Inocentes: Luis Mandoki監督)という映画が参考になる。ロサンゼルス在住のサルバドル人俳優オスカー・トレスの少年時代を描くこの作品は、トレスが十四歳で内戦下のエルサルバドルから米国へ亡命するまでの体験を語っている。

内戦の原因を丁寧に調べてみると、その発端は一九三〇年代まで遡る。一九二九年の世界恐慌によって主要輸出品であるコーヒーが大打撃を被り、政治経済エリートと深く結びついていた当時の軍人出身の大統領エルナンデス・マルティネス (Maximiliano Hernández Martínez: 1882-1966) の強権体制は一九三三年、困窮したインディオ農民による反乱を大弾圧で押さえ込み、三万人以上が犠牲となった。以後五十年近く軍政が続ぎ、一九八〇年三月、暴力と抑圧の停止を説いてきたオスカル・ロメロ大司教 (Óscar Arnulfo Romero y Galdames: 1917-1980) が極右部隊に暗殺され、それを機に、左翼勢力の統一軍事組織 FMLN (ファラブンド・マルティ民族解放戦線、都市の労働者や農民に基盤を持つ) が誕生し、政府軍(綿花やコーヒー農園、銀行などを独占する「十四家族」の権益を守ろうとした)との全面内戦に突入していった。当初、FMLNは優勢に戦いを進めていたが、米国から送り込まれた軍事顧問の支援で政府軍が勢いを盛り返し、内戦

は激化していくことになる。ロメロ大司教は、大多数のサルバドル人が被った人権被害を証言しながら貧困層の人々の側に立ち、エルサルバドル内戦の実情を世界に訴えようと、勇敢に発言し続けたイエズス会の司祭であった。ロメロ大司教の葬儀には、世界中から百万人以上の参列者が集まったと言われている。

内戦に終止符が打たれたのは一九九二年、私がエルサルバドルを初めて訪問したのはその四年後のことだから、内戦の爪痕はまだいたところに残っていた。十二年間にも及んだサルバドル人同士の戦いは、七万五千人以上の死者と八千人の行方不明者、そして百万人近い難民を生んだ。また多くの子どもが親を亡くし、行き場を失った彼らは路上で生きるか、孤児院送りかの二者択一を強いられた。その苦しみを紛らわすため、子どもたちは安価な靴用接着剤「ペガ (pega)」(代用麻薬) に手を染めてしまう問題が深刻化していた。

「開かれた家」

そんな時、メキシコの大学で文学と哲学を教えていた一人のイタリア人、ジョヴァンニ・リヴァが、飛行機の中でエルサルバドルの若者と隣り合わせになり、内戦下の人々の苦しみを知ることになる。彼こそが姉の恩師であった。当時、リヴァ先生は中南米の若者の貧困問題に関心があり、貧しさが理由で教育を受けられない若者を輩出し続ける社会に対して警鐘を鳴らし、教育こそが社会の不正と闘うための武器であると訴えていたジャーナリストでもあった。リヴァ先生はメディアが報道しない内戦の実情を知ろうと、その後、エルサルバドルに何度か赴くようになったという。彼は、現地でサン・スクリストバル孤児院に案内され、年齢制限のため施設を出ていかざるを得ない少年少女たちがいることを知る。再び行き場を失った彼ら(主に少女たち)に、リヴァ先生は一九九三年、元孤児たちが安心して生活できる場が必要だと考えるようになった



エルサルバドルの人々とロメロ大司教(中央)

た。そこで始まったのが「開かれた家」と呼ばれるセンターである。そこに通ったのが三人姉妹のデイジー、カルメン、メリダであった。リヴァ先生はこの働きの重要性を周囲の人々に訴え、それに賛同した教え子たちがイタリア、日本、また世界各地から集い、同年十一月、現地のサルバドル人と共にスタッフとして働くようになった。リヴァ先生はいつも「現地の人々の友となるように。サルバドル人の友になるなら、彼らが抱える問題が分かり、一緒に直面できる」と、何度も教え子たちに話していたという。

センターが開設されると、スタッフは路上で暮らす少女たちに会いに行き、できるだけ多くの時間を一緒に過ごしたという。首都にある中央公園で生活する少女たちは、身の安全を確保するために「マラス」(米国のロサンゼルスで発祥した中南米出身のギャンググループ)と呼ばれる非常に危険な集団に属さなければならなかった。いくつも存在するマラスの間には常に抗争が絶えず、その恐怖心から、少女たちのほとんどはピストルやペガを手放すことができなかったという。

しかし、少しずつ少女たちとの間に信頼が生まれ、センターに足を運ぶ子たちが増え始めた。少女たちはベガ、ナイフなどをセンターの入り口に預け、石鹸とシャンプーを手渡されシャワーを浴び、清潔な服に着替え、脱いだ服を洗濯する習慣を身につけ始めた。またグループごとに読み書きや生活指導などを受け、正午になるとスタッフと一緒にテーブルセティングや給仕をして、皆でテーブルを囲みゆっくり食事を共にした。その後、一時間の昼寝があり、トラランプをしたりテレビを見たりした後、中心街の公園に戻る前に、翌日自分が着る服にアイロンをかけ、それをタンスにしまった。時には、病院や刑務所にいる仲間にスタッフと一緒に本や手紙を届けることもしたという。少女たちは少しずつ人に対して信頼を取り戻していくように見えたが、自分と同じように見捨てられた仲間との絆を容易に断つことはできず、再び路上へ戻っていくものがほとんどだったという。そんな姿をルチアは何度も目にして、「少女

たちの勇敢さを黙って見届けるだけだった」と語ったことがある。

「開かれた家」は閑静な住宅街にあったため、その存在をよしとしない住民がいた。路上で暮らす少女たちがその地域に出入りするのをひどく嫌ったからである。同じ国民であっても階級の差は天と地ほどあり、日常生活の中で彼らが交わることはほばない。また当時、このような青少年への支援の例は少なく、社会から「犯罪者」として扱われていた少女たちに手を差し伸べることは、非現実的でスキャンダラスなことでもあった。センターの運営がようやく軌道にのってきた頃、一部の住民らのデマによって、センターはわずか一年半で閉鎖に追い込まれてしまった。事実、少女たちを無償で擁護するこのセンターの存在を、マラスはよく思わなかった。

その後、スタッフはサンタ・セチリア高校の協力を得て、学校敷地内のサッカー場の一角にあるクラブハウスを借り受け、洋裁講座を開講した。未婚の母親たちが少しでも技術を身につけ、それが収入に繋がればとの思いからだだった。電動式ミシン四台と足踏み式ミシン三台が寄付金によって設置され、スタッフも母親たちと一緒にその講座を受講した。講座に通う女性のほとんどが若い母親だったので、当たり前であるが子どもと一緒に通ってくるようになった。そこで出会ったのがウイリアムとモニカという兄妹である。ウイリアムとモニカは、「あそこに変な日本人がいるよ」とマルゲリータ地区の仲間に呼びかけ、それを面白がった子どもたちが母親と共に洋裁講座に集まるようになり、みつばち保育所へと発展していくことになる。

みつばち保育所

保育所が始まったのは一九九七年、内戦が終わって五年後のことであるから、住民や子どもたちにはまだ内戦の記憶が深い傷として残っている、子どもたちは落ちつきがなく喧嘩ばかりしていたという。実際、一

九九九年に私は初めて保育所の子どもたちと会ったが、当時七歳だったジェシカは、仲間と喧嘩するたびに唾をかけまわし、それを止めようと腕をつかんだ私は、大人並みの力で足を蹴り倒されてしまった（青あざが消えるのに一週間かかった）。ショッキングな出来事であったが、内戦がどれほど子どもを苦しめ、追い詰めてきたかを痛感する経験となったのを今でもよく覚えている（映画『イノセント・ボイス』に、内戦下を生きる十一歳の少年チャバとその家族が描写されている。子どもの命を必死に守ろうとするがために、母親がチャバに暴力を振るうシーンが何度も出てくる）。

現在、みつばち保育所は子どもたちが住むマルゲリータ地区から少し離れた新しい場所に移設され、現地の大学生ボランティアがマイクロバスで子どもたちを送迎している。しかし、子どもたちが生きる環境は今も変わらず過酷である。公立学校に通う子もいれば、貧しい家族の手伝いをしなければいけない子もいる。約三百世帯が集住する地域で、子どもたちはほぼ何のサポートも提供されていない。医療サービスはもちろんのこと、十分な食事も受けられないため、ほとんどの子どもは栄養失調である。そのため、保育所では栄養素の高いおやつを毎日提供するようにしている。子どもたちの住むバラックには下水道はなく、体を洗うスペースさえない。よって、子どもたちは疫病（チフス、デング熱、ジカ熱等）にかかりやすい。十歳になったとしても、一度も医者に診てもらったことのない子どもばかりである。結果、病歴を確認できるカルテは存在しない。そこで、医者の友人の協力によって、子どもと親が一緒に健康診断が受けられる「メディカル・デー」を保育所内で定期的に設けている。生まれて初めてカルテを目にする親たちがほとんどであったが、このサービスが開始されて約十年が経ち、子どもと親たちの健康はずいぶん改善されている。

保育所が始まった当初からエルサルバドルで生活する友人のアンドレアは、その後この国の大学で弁護士資格を取得し、現在この地域の貧しい



「メディカル・デー」にて初めてカルテを受け取る子どもの家族（2018年、©オリーブジャパン国際開発協力協会）

人々のために法律支援を行っている。無学な子どもたちの親は、日常生活においてたびたび騙されることがあるという。貧しい人々の多くは、過酷な農業（主にコーヒー農園）に何十年も従事しているため、指紋が消えてしまうのだという。農作業に使う道具による職業病がその原因である。この国では指紋がなければIDカードを持つことができない。そうになると自分が所有する畑が自分のものであると証明することができない。結果、貧しい人々の畑が盗まれるという悪質な犯罪が頻繁に起こってしまう。アンドレアは、被害者である人々と一緒に市役所に出向き、本人確認の書類作成手続きを進め、難解な問題を法的に解決できることを教えている。

子どもたちを取り巻く問題を挙げればきりが無い。そしてこのスラム街はマラスが支配している地域であるため、内戦終結から二十五年以上経た現在でもその治安は想像を絶する。しかし、マラスはこの地域に出

入りするスタッフに害を与えない。それは時間を経て、スタッフが負しい人々のために見返りなしで働いているということを知ることになったからである。

日本での活動

二〇〇一年三月、私はカナダの留学を終えて日本に帰国し、以来、オリブジャパン国際開発協力協会（NGO）を通してみづばち保育所に通う子どもたち、またそこで働く仲間への支援が続いている。また、ゼミでは「移民・難民」をテーマに、自分と異なる他者（他民族、異文化の人々）を知る試みを行っている。その中で、エルサルバドルを紹介するのだが、この国名

を初めて耳にする学生がほとんどかと思えば、意外とそうでもない。近年の中米諸国から米国に移動する「不法移民集団」の報道を通して、学生たちはこの国の名前を何度か聞いたことがあるという。

去年の合同祭で、六名のゼミ生の協力を得



チャリティーバザー、写真展の様子（合同祭2018）

て、初めて学内でチャリティーバザーと写真展を開催した。私を含め全員、試行錯誤の連続であったが、学内の教職員の方々の協力と、また学生同士の呼びかけによって多くの品物が集まり、研究室は一時期、ドアの開け閉めができなくなるほどバザー用品で溢れた。

学生たちと共に

今年、実際にエルサルバドルを知る試みとして、学生たちと映画『イノセント・ボイス』を鑑賞した。十一歳のチャバは、政府軍とゲリラの境界線にあったクスカタンシンゴという村に、母親と姉弟と生活している。父親は内戦下にある祖国に愛想を尽かし、一人米国へ去ってしまった。残された一家の大黒柱になったチャバが恐れているのは、十二歳の誕生日を迎えることであった。政府軍に徴兵され、無邪気な子ども時代が終わってしまうからである。ある時、チャバの家に懐かしいベト叔父さんがやってくる。反政府のゲリラのメンバーだという叔父さんを囲み、一家で団欒するも束の間、激しい銃撃戦が始まる。この夜、近所に住む女の子が弾に当たって死んでしまった。悲しむチャバに、ベト叔父さんはギターを奏で反戦歌を歌う。Casas de Carton（『ダンボールの家』）というこの歌はエルサルバドルだけでなく、中米諸国の人々に今でも大変愛されている。

ダンボールの屋根に／雨音を聞く哀しさよ

ダンボールの家に住む／ぼくたちの哀しさよ

労働者が丘を下りてくる／苦労の重みに足を引かず

ああ、なんてつらい／苦労が多くのかかる

丘の上に身重の妻を残し／見下ろせば町

都会の魔手にかかり／きょうもきのうと同じ／あしたのない一日

大地の色した子どもたちは／大地と同じ傷をかかえ／腹は回虫だらけ

ああ、だから／ダンボールの家に住む／子どもたちの哀しさよ
 犬たちは陽気に暮らす／搾り取る者の屋敷で

信じないかもしれないが／犬にも学校がある／新聞を噛まないように
 教えこむのさ

だが、その主人は／何年も何年も／労働者に噛みついている
 ダンボールの家に住む／子どもたちの哀しさよ

このシーンは、とても悲しく、そしてとても美しい。映画を観終わった後、多くの学生がこの歌に関してコメントを残した。以下は、ある学生の感想文である。

「この映画を見て、銃撃戦下で毎日を生きていくことの壮絶さ、また常に死の恐怖と隣り合わせで生きていかなければならない彼らの計り知れない恐怖心を感じた。子どもたちが十二歳になると政府軍に徴兵されることを知り、さらに子どもたちは強制的に軍に徴兵され、武器を持たされ、戦場に向かわせることを見て、なぜそんな悲しみしか生まないことをするのかと思った。子どもを連れていかれる母親の悲しみ、家族と離れ離れにならないといけない子どもたちの嘆きが、この映画を通して一番強く感じたことである。政府軍は市民の命を物として扱っているような描写があり、「ゲリラ」と呼ばれる反政府組織こそが実は市民のため、またエルサルバドルの平和のために人生をかけて戦っていると感じた。子どもたちが、市民の命を奪う政府軍には徴兵されたくないという屋根の上に隠れている場面があり、こんなことをしないといけない状況に毎日怯えて生きている彼らのたくましさ、そして生き延びようとする勇敢さに、将来に対する希望を感じることができた。しかし、毎日犠牲者が出る日々を生きている状況はとても過酷で、想像してもしきれないものであると思った。

そして、「反政府組織のメンバーである叔父が教えてくれた反戦歌が、

この映画のキーポイントであると思った。これを教えてもらってからチャバはこの歌を忘れず、それを頼りに生気を取り戻したからである。この歌は当時禁じられている危険なものだと知っていながらも、チャバはこの歌をラジオを通して聞き続けていた。この映画のタイトルにもあるように、この歌は「Innocent Voices」の1つとして示されているのではないかと思った。人間は何か頼り、縋り付いてしまう生き物である。それが家族であったり、友人であったり、恋人であったり、それは十人十色だと思う。この反戦歌がチャバにとって、毎日死と隣合わせで生きる子どもや市民にとって、とても大きな存在だったのだと思った。この映画に出てくる神父ですら「もはや祈るだけでは足りない。団結して声を上げ立ち上がるしかない」と言う場面がある。声を上げるのは命を危険にさらすことになるが、命を守る方法はそれしかないということになる。

このような過酷な生活は、毎日が死と共に訪れるような状況下で生きた人にしか分かることができないと思う。改めて、戦争、内戦の壮絶さと凄惨さを知ることができてよかった。」

『おおきな木』のめざすもの

合同祭で開催した企画を、今年も昨年に引き続き、「The Giving Tree Room」とすることにした。米国で一九六四年に出版された絵本 *The Giving Tree* (by Shel Silverstein、邦題『おおきな木』) から借りている。

学祭前日の金曜日、学生と一日の長い準備を終える頃、一人の学生が黒板が殺風景だと絵本の表紙を見ながら *The Giving Tree* のイメージを描き始めた。緑の葉でいっぱいのおおきな木が、その下で遊ぶ小さな子どもに真っ赤なリングを分け与えるあの有名なイメージである。書き終えた後、まだ何かが足りない印象だった。「それなら、この展示会に来ていただく人たちに私たちが伝えたいメッセージを考えよう」となった。そ

の学生は座って絵本を最初から読み直し、しばらくしてからあるフレーズをゆつくりと書き始めた。

“I wish that I could give you something ...

but I have nothing left.

Come, Boy, sit down. And the tree was happy”

エルサルバドルのような日本と馴染みのない国のため、またみづばち保育所の子どもたちのように貧しく目立たない小さな場所のために働いていると、「もつと近くに人を助けたらどうか」と言われることがよくある。実際に実の親族からも、「そんな危険な国のために」と何度も言われてきた。しかし、そこには友人がいて、その仲間を通して新たに出会っていく人々がいる。

私自身、こんな地味で小さな支援を続けて意味があるのだろうかと思いついた時期がある。そして、ある時、現地で働く弁護士のアンドレアに質問してみた。「一生懸命こちらが労力を費やしたとしても、結局子どもがギャングと関係を持ってしまうたり、音信不通になったりして、やりがいを失うことはないのか?」と。アンドレアはこう答えた。「もちろん、残念な気持ちは残る。だけど、内戦を生き抜いた人たちにとって、人生の中のある時期に、とても良い仲間恵まれ、その人たちと本当に良い人間関係があったと記憶に残るだけで、その人たちの生きる希望になると思う」。

これからも学生と経験を通して、他民族、異文化の人々を知る学びを重ねていきたい。他者の存在を知ると、新たな自分を発見することにも繋がると思うからである。

(よしみ かおる)



学生たちと、“The Giving Tree Room”にて（合同祭2018）